

夜の鶴

芝木



夜の

木好子

初版印刷 昭和三十九年十二月二十日
初版発行 昭和三十九年十二月二十五日

定価 三八〇円

著者 芝木好子

発行者 河出孝雄

夜の鶴

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の八

電話東京二九一局三七二一

振替東京一〇八〇二

印刷 東京印刷株式会社

製本 中西製本株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします

©一九六四

目次

不 忍 池
夜 の 鶴
男 坂

あとがき

五

巻

三

一

装幀
田古島
敬

長編小説

夜の鶴

不 忍 池

家のなかの小さな物音に千賀子は目覚めた。早朝の薄い明りが高窓から射しこんでいる。
下谷界隈したやのこの時刻は真夜中に等しくて、しんかんとしている。洋服に着替えて出てゆくと、
思った通り女中のはまが勝手元で身じまいをしていた。寝すごしもせず現れた千賀子をみ
ると、はまは感心して、小声で褒めた。

「よく起きましたね」

流して顔を洗うと、十三歳の千賀子の朝の支度はそれですむ。あたりに気を配って、物音
を立てないように、二人は勝手口をあけた。鶴の家は千賀子の祖母である女主人が昨夜から
帰らないので、抱えが五人奥に寝ているだけであった。

黒板塀で囲った鶴の家は小路の角にある。夜になると待合や料亭のならば小路の両側から

鳴物やさざめきが立って、軒燈の下をゆく男の心を誘う巷である。人と人の肩を割って小走りにぬけてゆく芸者があつたりする華やいだ色町も、一夜明けるとうそのようにひっそりして、しらじらしいほどがらんとしている。上野広小路の松坂屋から本郷三丁目へ向う切通しの坂下にかけて、電車通りの片側は同朋町、もう一方は数寄屋町で、電車通りの一かわ裏は一带に花柳界であつた。昭和十三年は下谷の全盛時であつた。千賀子とはまが表通りへ出ると、割引電車がまだ醒めきらない朝靄のなかから揺れながら走ってきた。

電車通りを渡って、池ノ端仲町から不忍池へ歩いてゆく道は、いわば自分の庭先を歩くような親しさでありながら、朝まだきの表情は千賀子には珍しかった。どの店も大戸を閉じ、硝子戸には布を引き、店のわりに狭い奥や二階で人がまだ眠りにかまけている時間である。下町の無人の通りに夏の朝風が看板を撫でていった。不忍池はもうそこにある。

「蓮の花の咲くのを見たい」

と鶴の家の女たちは合言葉に交しながら、誰も奮発して朝早く起きだす者がいない。毎月初巳の日が弁天様の日で、はまは欠かさず朝詣りする。そのことが奥で千賀子の母の小鶴もまじえて話に出たのは二三日前であつた。

「あたしも行く」

千賀子はそう言ったが、誰も氣に止めたわけではなかった。行こうと思えば目を瞑つても

二分で行ってしまふ距離にあった。

不忍池は蓮の葉で埋められていた。ひろく弧を描いた池の水面は乳色の靄におおわれながら、にぶい光の筋を空から引いて、朝明けのくるのを告げていた。はまのあとから千賀子は池のふちを廻って歩いた。淡紅色の大輪の蓮の花が水面に咲いていた。

「もう咲いちゃったの？」

「ほら、音がしますよ」

ポツ、と立つ音が蓮の花の蕾から開花するときのものとされているが、千賀子には聞きとれない。眼を凝しながら池をまわっているうちに、水中花はその数を増していった。

「あ、開きましたよ」

「どれさ、どれ、あつ開いた！」

割れて淡紅色の花弁は初々しく誕生した。少女が薄化粧によそった姿に似て写ると、はまは千賀子を振り向いた。色白ですらった少女は、大きな眼の眼尻が、黒い眉ともども、ほんの心もち下がっていて、受け口の唇が愛らしい。顔も姿も母親の小鶴に似ていた。いまの千賀子と同じ十三四歳のころの小鶴は、この界限で、

「夢二の小鶴さん」

と呼ばれた。竹久夢二が下谷に居続けして、幼ない雛妓の小鶴をすかしながら描いた絵は

かなりある。大きく潤んだような黒い眼が多感な画家の心を捉えたのだろう。千賀子は小鶴の顔や姿をうつして、眼瞬きすると音がしそうに睫毛も濃かった。この少女を一日でも雛妓にしてみたいと、彼女の祖母の関が望むのも無理ではないとはまは眺めた。

大きな池を迂回しながら、上野の山下にいくと、池にかかる橋があって、弁財天は池の中の陸地に社やしろがあった。朱塗りの神社である。朝詣りの人の姿もみえる。境内には池につき出した料亭があって、ここも下谷芸者の箱が入った。風流をよろこぶ粋客は、夏座敷の涼しさより、雪見や、すがれた蓮の葉どきの冬景色が佳いといった。座敷のかかった妓は人力車に乗って、ここまで通ってくる。

「弁天様は男の人と二人でお詣りしてはいけないんですよ。女の神様は嫉きもちで、仲を裂くそうですよ」

御堂にゆくと、はまは賽銭をあげて手を合せた。三十歳に近い年齢で芸者家に奉公している女には、それなりのわけがある。賽銭をあげた分の何層倍にのぼる願いの丈を一心不乱に彼女は念じた。心からさまざまの思いを吐きだすことで、念じたことの幾らかは達せられたように軽くなる。拝みおわって、ほんと眼をひらくと、柏手を打ってうやうやしく一礼した。はまは千賀子が退屈して、とうに境内へ出ているとおもった。急いで下ろうとして、まだ隣りに立っている少女に気づいた。千賀子は顔をあげてじっと社殿の正面を見ている。なにを

眺めているのでもないから、心におもっていることを頭にうかべているにちがいない。それも神社へきてする祈りの一つであろう。

二人は境内に出ると、どちらともなく池のふちによって、柳の木の下の大きな自然石のそばへいった。いつもは茶店がひらいて、屋台店も並ぶ賑わった弁天堂も、まだひっそりしている。しかし空が明るみを増し、池のまわりに人影がみえて、植込みの外の山下を通る電車の音もした。千賀子は朝の澄んだ空気をおいしく吸いこんだ。

「涼しくていいですねえ、千賀子さん、なにを拝みました」

はまは訊いた。千賀子のような特殊な環境の少女は、めぐまれているのか、不幸なのか判断がつかない。自然石の上に腰をおろして、ひろい池の面に眼をやると、はまは吐息をついた。水郷に育った彼女は、水のあるところがなつかしい。そこにいる老母に小さな子供を預けてある。子供に父親のことを告げる日はないだろう。こうした境遇は色町の女には掃いて捨てるほどあったし、小鶴と千賀子にしても似たようなものであった。

「当ててみましょうか、女学校の成績」

はまは言ってみた。

「違う」

と千賀子は短いお下げの髪を振った。はまは話題を変えてみた。

「千賀子さんは何になりたいのです」

「絵描きの奥さん」

すると、はまはにやにやした。小鶴はいま画家と同棲していた。

「絵描きと一緒にになったら、苦労ですよ」

「聞いてみるわ」

千賀子は細い肢を伸したまま、首を左右にして池のまわりや境内へ視線をやった。その時になって、はまは小鶴も朝詣りしたいといっていたのを思い出した。すると千賀子が早起きしたのは、蓮の花をみるためではなかったかと、いじらしい気がした。

「お座敷のあるひとは、無理ですよ」

「お母ちゃんはいつも約束を違えるわ」

千賀子は小学校へ上る前、母と祖母につれられて湯河原へ行ったことがある。その日はどうしてか歯が痛んでたまらなかった。痛み止めの薬を買ってきてあげようと小鶴は言って、夜の町へ出ていった。頬つぱたに濡れ手拭を当てて、痛みをこらえながら、なにも食べずに千賀子は待った。薬をのみさえすれば不快な痛みは去るだろうし、御馳走もたべられると思った。待ちつづけたが、それぎり母は帰らなかった。祖母の関がどんなに^{すぶ}賺しても、彼女は眠らなかった。

あとになって思うと、小鶴はちがう宿で男と会っていたのである。色町に育った彼女はそれくらいの分別はつく。しかし湯河原ではまだ幼なすぎた。幼ないながら、ひたすら待って裏切られた痛手は残った。齒の痛みに加えた怨みは、ずっとあとまで忘れなかった。小鶴はそうした小さな裏切りを幾度となく千賀子に与えた。また嘘をついた、と母をなじるたびに、やわらかい布へ爪を引くような傷をうけた。それでもまた母が朝詣りするといえ、千賀子は眼をこすりながら起きた。二人きりになる時間は絶えてなかったのである。

はまが先に自然石から立上った。池の水を眼にいつくしんだせい、か心も和んだ。朝の活気にみちたざわめきが、山下からも池のまわりからも立ってきていた。公園には清掃人が道を掃き清めていた。不忍池は明るんで、散策の人の姿もみえ、千賀子は氣をつけながら歩いた。池を出たところで、天神下のほうから自転車に乗った男の子が四五人、つながって走ってきた。白いシャツとピカピカ光った自転車はすがすがしかった。どの顔もこの界限で見馴れた少年たちであつたが、二輪の車の上に乗った高さが、いつもより彼等を颯爽とみせた。同じ小学校で同年だった宮川香一もまじっていたが、背丈の伸びた感じは人変りしていた。彼も置屋の息子で、その母は小鶴と朋輩の踊りの名手であつた。千賀子は手をあげた。少年たちはペダルを踏みながら、親しい眼差を投げて通りすぎていった。まだ戸を閉ざした池ノ端の料亭や旅館の前の通りから、一列の自転車は山下へまわってゆく。香一の横顔も、含羞んだ

表情のまますぎて、背をまるめた後ろ姿が残った。

「いいですねえ、男の子は」

はまは立つて見送った。千賀子は自転車に乗った香一も、母親の眠ったまに出てきたろうと思った。

池を出て、電車道を渡ると、切通し下や、湯島天神下につながる大通りであった。千賀子は鶴の家へ帰るつもりのはまに、

「先へ帰って」

といった。それからなんの説明もなしに大通りの向う側へ渡った。最初の坂は湯島天神の境内へ登る男坂で、急な石段が一直線に伸びている。次の坂は広いだらだら坂の仲坂で、彼女はこの坂をゆっくり斜めに歩きはじめた。端しまでくると、また向きをかえて斜めに上ってゆく。ゆるゆると遊び半分に、石を蹴って歩いても、坂道はがらんとして、自転車も通らなかった。

坂の上り際の、とある横町にそれてゆくと、ひっそりした下町の住宅が並んでいる。一方は崖を背に、一方は平地であった。格子門のある二階家の前までくると、彼女は上を仰いだ。家の前をすぎながら、じっと気配を聞いてみる。日曜日のせいもあって近所から物音もしない。二階の座敷に寝ている母と朝蔭信を千賀子は身を感じていた。以前彼は鶴の家の二階に

きて泊ったから、たずねてきても不自然ではなかった。しかし男と女が眠っている部屋の雰囲気、少女はみそかごと理解していた。女が愛されることは、そうすることであろうと思つた。しんと寝静まつた家の内によると、格子門を注意深くあけてみた。玄關の硝子戸も締まっているし、窓も一つとして覗けるすきもなくとざされていた。家の肌を撫でるように、ゆっくり裏口へまわつてみて、鍵のかかった戸の前に立っていると、

「誰？」

とふいに、わきの奥の入口の小窓から、女の顔がのぞいて、千賀子をぎよつとさせた。

「千賀子さんですか」

女の方も小さな闖入者にびっくりしたとみえる。顔を引っこめると、台所口へまわる足音がした。女中の春であった。千賀子は咄嗟に逃げ出す気になったが、二三歩して思い止まつた。白い寝巻を着た、睡むたそうな春のまうい顔が戸口から現れた。

「早いですねえ、御用ですか」

「お母ちゃんは？」

「お二階で寝てますよ、一人だから行ってごらんなさい。」

ふうんという千賀子の顔をみてから、春は厠へ立っていった。まだ半分眠っている。一人寝の母は思いがけなかったので、千賀子はそろそろ戸口から足を入れた。まだ小暗い家の空

気は動いていない。階段を踏みしめると、板が軋んで、不安な気がする。二階の裏座敷が寝室なのを知っていた。襖を細くあけてのぞくと、小鶴が寝ていて、日本髪ががっくり落ちたようにみえる。白い顔は向う方に傾いて、夏掛けふとんから腕を投げだしている。雨戸を立てた小暗がり、酒の残り香がすえてただよった。眼が馴れると、たらんと投げた腕から胸もとまで、ガーゼの寝巻が巻きついて寝乱れた姿である。喉から細い頸にかけての線が青白くねじれて、いじめられた姿態にみえる。

「だれなの」

うつつの声で訊いた。

「千賀子よ、朝詣りにこなかったのね」

「眠いから、お入り」

小鶴の蒲団の中へ千賀子はするつと入った。生身の熱気がこもって、からだの触れあうところがやわらかい。千賀子は母の半身に抱きつくようにからだをよせると、眼を閉じた。甘い肌の匂いがする。二本の肢を伸すと、母のくねらせた足の先に触れて、足の裏がしんなり窪んでいる。髪油の匂いがした。嗅ぎながら、母のからだを感じているうち、眠りのなかへおちていった。

階段の踊り場の小窓を開けにきた春が、そのまま引返していった時、一人が身じろいで、